



左より高田早苗・天野為之・坪内逍遙

二〇一〇年度秋季企画展
「早稲田四尊生誕一五〇周年記念 高田早苗展」

真 辺 将 之

早稲田大学の創設者は大隈重信である。しかし、実際に東京専門学校創立から、早稲田大学へと発展していくにあたって、長らくその運営の実務を担い続けたのは、高田早苗・市島謙吉・坪内逍遙・天野為之のいわゆる「早稲田四尊」と呼ばれる人々であった。彼らはいずれも東京大学の同級生であり、二〇一〇年は、彼らの生誕から数えて一五〇年の記念すべき年に当たる。

四尊のなかでも、とりわけ高田早苗は、東京専門学校創設時から教壇に立ち、早稲田大学の初代学長・三代総長をつとめるなど、小野梓没後の学苑運営の中核を担った人物であった。大
学史資料センターでは、秋季企画展「高田早苗展」を開催し、

早稲田大学の育成に果たした高田早苗の役割を追うとともに、政治家・ジャーナリスト・政治家など高田早苗の多面的な活動にも焦点を当てることとした。高田早苗の多方面にわたる先駆的な業績をこの機会に少しでも知っていたらという趣旨である。



チラシ表



展示風景

一 生い立ち

高田早苗は、一八六〇年三月一四日、江戸・深川の伊予橋通り（現東京都江東区）に生まれた。姓は「たかた」と濁らずに読む。高田家は、享保年間に紀州和歌山の商人高田茂右衛門が徳川吉宗の將軍就任に伴って江戸に出、幕府から通船事業の特許を受けて財をなした。曾祖父にあたる高田与清は、「小山田与清」の名で、国学の四大人の一人として知られている。しかし維新前後の混乱の中で高田家は家財を蕩尽し、早苗の幼年期にはその日の生活にも困るほどの状態に陥った。だが、そのような中でも早苗は学問を志し、東京開成学校に入学、さらに東京大学大学部へと進学する。

〔主な展示品〕

- 高田早苗年譜（パネル）
 - 高田家系図（パネル）
 - 高田早苗肖像（埴原久和代画、一九二四年。会津八一記念博物館所蔵絵画一四七）
 - 『半峰昔ばなし』（一九二七年刊。大学史資料センター所蔵D三二一五）
- 市島謙吉・坪内逍遙の熱心な勧めに応じ、自分の経歴を語った自伝。明治史の貴重な証言としてしばしば引用される。

○薄田貞敬編『高田半峰片影』（一九四〇年刊。大学史資料センター所蔵D三三二一）

『半峰昔ばなし』の記者である薄田貞敬（斬雲）が、高田の旧知の人々を訪問して材料を集め執筆した高田早苗の外伝。

○京口元吉著『高田早苗伝』（一九六二年刊。大学史資料センター所蔵D三三二二）

早稲田大学創立八〇周年を記念して出版された、高田早苗の唯一の伝記。

○『高田早苗の総合的研究』（二〇〇二年刊。大学史資料センター所蔵D三三二一七）

教育者、政治家、政治学者、ジャーナリスト、経営者などの高田の多面的な活動を浮き彫りにしている。

○小山田与清肖像（写真パネル、原本は高田興治氏所蔵）

高田家六代目の高田与清（二七八三～一八四七年）は、武州多摩郡小山田村出身の国学者で、高田早苗の曾祖父にあたる。一般には隠居後の小山田与清の名で知られている。平田篤胤・伴信友と並んで国学の三大家と称された。早苗は『読売新聞』社説などで「松屋主人」の筆名を使っているが、これは、小山田与清がその書齋の名から「松屋」と号したのにならったものである。

○松屋筆記（図書館所蔵イ五一九三二一～二二〇）

小山田与清の自筆稿本。一九〇八年、高田早苗の協力を得て国書刊行会より刊行された。その後一九二七年に高田は本筆記をはじめとする小山田与清関係資料を図書館に一括寄贈した。

○高田貢平肖像（写真パネル、二世五世田芳柳画。原本は高田興治氏所蔵）

早苗の父。もとの名を高田小太郎（清常）といい、維新後貢平と改名した。

○高田文肖像（写真パネル、二世五世田芳柳画。原本は高田興治氏所蔵）

早苗の母。小山田与清の門人で幕臣の富田命孝の二女。

○七歳の高田早苗と母（『半峰昔ばなし』より。写真パネル）

高田家所蔵の写真類は戦災でほとんど焼失してしまった。自伝に収録されたこの写真は、不鮮明ではあるが、早苗の幼少期を伝える唯一のもの。

二 東京専門学校の創設と高田早苗

早稲田大学の前身・東京専門学校を創設したのは大隈重信だが、実際にその運営の実務を担ったのは、大隈のブレーン・小野梓と、高田早苗をはじめとする若者たちであった。一八八二年七月、高田は東京大学文学部を卒業すると、文部省からの任官の誘いを断り、東京専門学校の創立に参加する。高田は、校規の起案、学生募集広告の創案、学科課程の編成や担任講師の手配などに関わるとともに、みずから講師として教壇に立ち、のちには学監として学校運営の中核を担い、東京専門学校を早稲田大学へと発展させる主導的な役割を担った。

〔主な展示品〕

○東京大学学生・高田早苗（砂川富子氏所蔵写真より。パネル）

前列左が高田早苗。右は砂川雄峻。後ろに立っているのは渡辺安積。砂川は東京専門学校創設に参加、関西組合代
 言人会長、関西法律学校（現・関西大学）講師・理事をつとめ、一九三三年に没。渡辺は東京日日新聞に入り、英
 吉利法律学校（現・中央大学）の創設に参加、農商務省に入省するも一八八七年に没。

○東京大学卒業写真（一八八二年。大学史資料センター所蔵写真B四三二〇一）



東京大学卒業写真

東京大学学生高田早苗
(前列右)

第二列左から二人目が高田。周りの学友たちに比べ背が高い。

○『フェノロサ講述』『哲学講義』（図書館所蔵イ四一四一九一六九八）

東京大学在学中の市島謙吉が一八七九年九月から十一月にかけてフェノロサの講義を筆記したもの。高田も市島と一緒にこの講義に出席していた。

○『東京専門学校年報 明治十五年度』（一八八三年。大学史資料センター所蔵E 二二五一一）

東京専門学校第一年目の公式記録。欧米史・憲法史・行政法・社会学・貨幣論・租税論など多くの科目を担当した高田早苗の授業報告も載っている。

○『主権論』（一八八二年。図書館所蔵「稲門ライブラリー」五六六五）

山田喜之助・岡山兼吉・山田一郎・市島謙吉と分担執筆し、東京大学卒業直前に出版された。高田にとって最初の単行書。

○東京専門学校第一回卒業記念写真（大学史資料センター所蔵写真B四三〇三）
一八八四年七月二六日、第一回卒業式が挙行され、一名が学窓を巣立った。大隈重信・小野梓・高田早苗らの姿が校舎入り口に見られる。

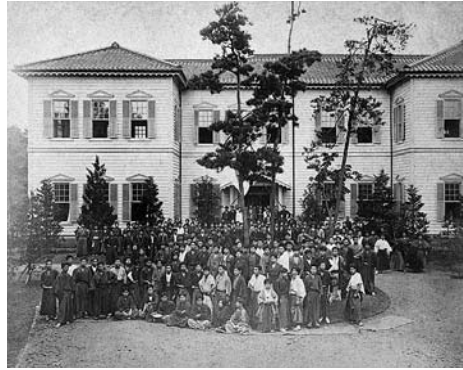
○坪内逍遙と高田早苗（演劇博物館所蔵写真をパナール化）

坪内が留年のため一年遅れて一八八三年に東京大学を卒業した時に撮影。

○『小説神髓』と『当世書生氣質』（図書館所蔵文庫一四一D三三〇、D三六九）



坪内逍遙と高田早苗



東京専門学校第一回卒業記念写真

日本近代文学を打ちたてた一八八五〜八六年発表の記念碑的作品。書生気質に登場する「小町田繁爾」は高田早苗がモデルになっているといわれる。

○講師と生徒（一八八五年。演劇博物館所蔵写真）

前列右から坪内・天野・高田が写っている。

○『東京専門学校壁書写』（二八九〇年。図書館所蔵ト一〇一―一九二）

生徒による落書きを写し取ったもの。生徒の講師評価を今に伝えている。

○早稲田付近（河合玉堂画、一八九七年冬。図書館所蔵絵画チ四一六三〇〇）

戸山ヶ原近辺を描いたものと思われる。遠景には農夫が牛を牽いでい

て、早稲田付近がまだのどかな農村であったことがわかる。河合

玉堂は橋本雅邦門下で、一九四〇年に文化勲章を受賞。

○東京専門学校学監印（大学史資料センター所蔵）

一九〇〇年に高田は新設の学監に就任した。校長の下、学校の教務一切を取り仕切る立場にあった。最大の課題は東京専門学校を早稲田大学へ改組することであった。

三 早稲田大学と高田早苗

一九〇二年、東京専門学校は早稲田大学と改称する。その初代学長に就任したのが高田早苗であった。一九〇五年に文部大臣就任のために学長を辞し、その後「早稲田騒動」により学苑を一旦は離れるが、一九一八年に早稲田大学が大学令に基づく正式な大学に昇格し、一九二二年に大隈重信が没すると、高田は学苑を代表する総長として大学運営に復帰する。

〔主な展示品〕

○半峰先生游支消息（大学史資料センター所蔵二〇〇五年外岡明氏寄贈）

一九〇五年三月から六月まで、中国を視察した際に妻に贈った手紙を貼り付けたもの。この視察の成果をもとにして、同年秋、早稲田大学に清国留学生部が設置された。

○『早稲田大学第二期計画』（大学史資料センター所蔵E一四一）

一九〇八年、医科と理工科の新設を目玉とする第二期計画案が策定される。高田は計画実現をめざして基金を募集するため、日本全国を飛び回った。その甲斐あって、一九一〇年に理工科が開設される。

○大隈重信宛高田早苗書翰（図書館所蔵「大隈文書」B一九八八）

早稲田大学校友会は、一九一四年、高田の長年の功績に報いるため、高田に欧米巡遊旅行をプレゼントした。その旅行中に第一次世界大戦が勃発、八月二六日付のこの書翰はその模様を大隈に報じたものである。

○洋行中の高田早苗ら（『半峰昔ばなし』より。写真パネル）

左から大山郁夫・増田義一・高田早苗・寺尾元彦・橋静二。

○高田早苗宛佐竹作太郎書翰（一九二一年五月二三日。大学史資料センター所蔵「安部磯雄文庫」Ⅱ-D-1、2）

安部磯雄が雑誌『実業之日本』に「東京電燈会社に対し電燈料の五割減を要求す」を掲載したのに対し、東京電燈会社社長佐竹作太郎は早稲田大学学長高田に安部訓戒を要求した。

○佐竹作太郎宛高田早苗書翰控（一九二一年。大学史資料センター所蔵「安部磯雄文庫」Ⅱ-D-3）

安部への訓戒を求められた高田は、「元来安部氏一個として自家の所信を発表いたし候次第にて、何分大学当事者たる小生より掣肘を加え、又は反省を求め候筋合い」はないとして、東京電燈会社社長の要求を断った。社会主義者である安部が、早稲田大学に籍を置きながら存分に言論活動をすることができたのは、高田早苗と大隈重信の理解に基づくところが大きかった。

○「プロテスタント原案」（一九一七年。図書館所蔵ト一〇二七三九）

大正期に入ると、卒業生が母校の教壇に立つことが多くなった。若手教員は、折からの大正デモクラシーの雰囲気の中で、自ら「プロテスタント」と称して早稲田大学改革を協議した。高田早苗文相の秘書官も務めた橋静二は彼らの意見を「プロテスタント原案」にまとめ、文相退任後の高田早苗が学長に復帰しこれを実行することを求めた。「早稲田騒動」はここから始まる。

○『早稲田大学紛擾秘史』（図書館所蔵ト一〇一七七二）

文部大臣退任後の高田が大学総長に復帰することの是非をめぐり、大学内は真つ二つに分れる。新聞や雑誌はこの「早稲田騒動」を盛んに報道し、結局、高田早苗と天野為之前学長の両者が大学を去ることになる。この『早稲田

『大学紛擾秘史』は、高田の命により、騒動の経過を克明に記したものの。

○『高田早苗直話筆記』（図書館所蔵ト一〇一二〇六七）

高田自身も「早稲田騒動」の経緯を語り残した。

○書幅「早稲田大学教旨」（高田興治氏所蔵）

「学問の独立」「学問の活用」「模範国民の造就」の三つを柱とする早稲田大学教旨は、高田が中心となって起草し、一九一三年、創立三〇周年式典に際して大隈重信総長が宣言した。これは高田が総長引退の一九三一年に書いたもの。

○「前総長高田先生銅像建設基金募集の趣旨」（一九三二年一月。大学史資料センター所蔵D三三三八）

一九三一年に高田早苗が総長を引退すると、校友会は高田の銅像建設を決議し、募金活動を開始した。このピラはその募金を呼びかけたもの。一九三二年一〇月、創立五〇周年記念式典当日に、大隈重信の銅像とともに除幕式が行なわれた。銅像は現在も、大隈重信像の左前にたたずんでいる。

○高田早苗銅像（大学史資料センター所蔵写真B九一―一、B一〇一〇四）

背景に写る恩賜記念館は空襲で焼失したが、高田の銅像は大隈銅像のかたわらで現在も学生を見守っている。

○書幅「早稲田学園に関する歌と句」（高田興治氏所蔵）

高田が早稲田大学に対して抱いていた熱い想いが伝わって



高田早苗銅像



古稀祝賀会にて
(左より市島謙吉・高田早苗・坪内逍遙・浮田和民)

くる。

○古稀祝賀会にて（一九二九年一月二〇日。大学史資料センター所蔵写真B九一―一二）

左より市島謙吉・高田・坪内・浮田和民。署名は各人の自筆。

○信夫淳平宛高田早苗書翰（一九二六年。大学史資料センター所蔵）

政治経済学部国際政治学に関する科目を設置することにつき、その道の大家信夫淳平（一八九〇年英語普通科卒）に意見を求めた書翰。

○「学制改革大体方針案」（一九三二年。図書館所蔵ト一〇―二二六九）

総長高田が自ら起草し、教務幹事岡村千曳に宛てたもの。帝国大学の模倣をやめ、「可成独自の工夫」をこらすべしと指示している。

この発議により、自学自修を重視するカリキュラム改革が推進された。

○高田基金通知簿（大学史資料センター所蔵「三号館旧蔵資料」三三一―二〇五、三四一―三六、三四―四〇）

一九二九年、有志は高田早苗の古稀を祝うと同時に、長年の功勞に報いるため「高田早苗先生記念基金」を募集した。高田はこれを「高田基金」として全額大学に寄附し、以後この基金は教職員の退職金に充当される。

○高田早苗辞表（一九三二年。早稲田大学法人課所蔵「評議員会記録」）

一九三一年、高田は総長を辞任する。大学は「名誉総長」の称号を贈ろうとしたが、高田は完全なる自由人として余生を送りたいと言ってこの申し出を断った。

○高田早苗銅像（早稲田大学大学史資料センター所蔵二〇〇三年度寄贈資料）

一九三二年一〇月、中央校庭の高田早苗銅像が作られた際、それを模して作られたミニチュア版。

四 政治学者高田早苗

高田早苗は東京大学で英米流の政治学をはじめとする最新の学問を学び、以後、政治学はもちろん、貨幣論・租税論等の経済学関係のものや、美辞学（修辞学）など、広い範囲の書物を刊行している。高田の学問の特色はその先駆性であり、つねに世界の最先端をいく新しい学問を日本に紹介しつづけた。

〔主な展示品〕

○『通信教授政治学』（二八九一年。図書館所蔵カ二六一四）

通信講学会より分冊発行された。これはのちに合冊刊行されたもの。初期の高田の政治学は範をイギリス政治学にとっていた。その特徴は、抽象的・観念的な議論を避け、具体的・実証的な議論を軸にしているところにある。

○『政治汎論』（二八九五年。大学史資料センター所蔵D三二一）

東京専門学校出版部から早稲田叢書の第一冊として刊行された。アメリカの政治学者で、のち第二八代アメリカ合衆国大統領に就任したウッドロー・ウィルソンの *The State* の翻訳である。

○『国家学原理』（二九〇〇年頃。大学史資料センター所蔵二〇〇〇四）

東京専門学校での講義をまとめたもの。『国家学原理』にはいくつかの版が存在するが、いずれも一九〇〇年の前



ウィルソン著・高田早苗訳
『政治汎論』

後数年にまたがる時期のものと思われる。この頃の高田は、当
時流行のドイツ政治学の影響を受けている。

○『政体論備考』（大学史資料センター所蔵D三二一七）

東京専門学校での高田早苗の講義を筆記したもの。筆記者は不
明。

○高田早苗講述『大日本帝国憲法』（図書館所蔵特ヌ六一九二一六一A
四）

のちに衆議院議長となる小山松寿（一八九五年邦語政治科卒）の受講ノート。

○『明治四拾年六月調 高田氏寄託図書目録』（図書館所蔵特ト一〇二六九二二二二）

高田は、学校に備えるべきと考えた欧米最新の学術書をしばしば図書館に寄贈している。

○林董『自治論』（図書館所蔵カ〇一五六一八）

○堀口昇『政学』（図書館所蔵カ〇二二三三二二）

○大石正巳『政経』（図書館所蔵カ〇二二三三二二）

リーバーやウールジの学説は高田らに大きな影響を与えた。これらはその翻訳書。

五 政治家高田早苗

一八九〇年、高田早苗は第一回衆議院議員総選挙に埼玉県第二区から立候補し当選、以後合計六回の選挙に当選し、

議会の回次にして一四回の議會を衆議院議員として活動した。高田は一貫して改進黨系の政党（立憲改進黨→進歩黨→憲政黨→憲政本黨）に所属。早稲田大学の経営に専念するため一九〇四年以降立候補せず、政界を引退したが、一九一四年に第二次大隈重信内閣が誕生し、翌年内閣改造が行なわれると、文部大臣に就任し、再び政界で活動することとなる。

〔主な展示品〕

○立憲改進黨解党反対意見書（大学史資料センター所蔵「大隈信幸氏寄贈文書」一二二二）

一八八四年一〇月、立憲改進黨解党問題が起った際に高田早苗ら鷗渡会関係者が連名で総理大隈重信に提出したものの。提出の甲斐なく、一二月一七日、大隈は改進黨を脱退してしまう。

○錦絵「帝國衆議院會議之図」（大学史資料センター所蔵二〇二一〇二一〇一三）

上部欄内中央付近「埼玉県」の項に「入間外三 高田早苗」の名前が見える。

○第一回総選挙に当選（『半峰昔ばなし』より。写真パネル）

高田は当時の新聞でしばしば「議會一の美丈夫」「改進黨の張子房」などとその風貌をもてはやされている。

○高田早苗遭難時の着衣（大学史資料センター所蔵）

第三議會開会中の一八九二年五月三〇日、高田は玄洋社の壮士四名に襲撃され、全治一ヶ月の刀傷を負うという災難にも遭った。

○『明治二十五年五月高田早苗遭難事件諸用留』（大学史資料センター所蔵高田文庫）

診断書・予審調書等の写や、高田への見舞品控などが綴られている。



第四回日露協約調印祝賀午餐会記念



第二次大隈重信内閣の閣僚

○『明治三十五年衆議院選挙高田早苗選挙資料綴』（大学史資料センター所蔵高田文庫）

選挙に際しての地元民からの高田への推薦状や、投票者名が記された資料などが綴られている。

○高田早苗立候補宣言書（図書館所蔵カー15000）

一九〇二年の第七回総選挙に出馬する覚悟をつづった自筆草稿。

○「議政壇上を飾った名演説・高田早苗」（『国会画報』一九八九年二月号、大学史資料センター所蔵D三三二二）

一九〇二年、教科書疑獄事件に際して政府を追及した際の演説は、議会史上の名演説として今日にも伝えられている。

○第二次大隈重信内閣の閣僚（一九一五年八月一〇日。大学史資料センター所蔵写真B八一―一九）

内閣改造の際、高田早苗（和服姿）は文部大臣に就任した。

○第四回日露協約調印祝賀午餐会記念（一九一六年七月八日。大学史資料センター所蔵写真B八一―一五）

ロシア政府外交団とともに。前列中央が大隈重信首相、前列左より二人目が高田早苗文相。

○高田早苗肖像（小山栄達画、尾崎行雄賛。図書館所蔵ヌ六九二二二）



文部大臣時代の高田早苗夫妻
(大正天皇即位大札時)

賛を寄せた尾崎行雄は、立憲改進黨結成以来の高田の政友であり、第一次大隈内閣の文部大臣、第二次大隈内閣の司法大臣を務めた。

○高田早苗「大学令要項」(パネル)

高田は私立大学をも正規の大学として認めるべきと主張していたが、文部大臣に就任すると、自らまとめた「大学令要項」を教育調査会に諮問した。戦後の新制大学を先取りするような高田案は、守旧派の抵抗にあつて審議が長引くうちに、大隈内閣が総辞職したため審議未了となつた。

○大札服姿の文部大臣高田早苗(一九一五年。高田興治氏所蔵写真をパネル化)

京都で大正天皇の即位札に参列した折に撮影。

六 ジャーナリスト高田早苗

高田は一八八六年一月に読売新聞の社説執筆者として招聘され、時折「松屋主人」の筆名で論説を寄せるようになる。ついで一八八七年一〇月一日、同紙の主筆に就任、紙面改革を断行し、著名な文学者たちを招聘して文学新聞としての名を高からしめる一方で、「国会問答」「通俗大日本帝国憲法註釈」などのわかりやすい政治論説を掲載して、憲法開設・議会開設にむけての啓蒙活動を精力的に行つた。こうした紙面改革の効果あつて、読売新聞の売上は飛躍的に伸びた。

〔主な展示品〕

○『国会問答』（大学史資料センター所蔵D三一一三）

一八八七年一〇月一日より翌年七月二二日まで一〇ヶ月にわたり連載された。通俗的な文体で、国会の仕組みについてわかりやすく解説している。この連載は大好評で、ために読売の売上は大幅に伸びたといわれる。本資料は高田が自ら貼りつけた新聞切抜帳。

○錦絵「憲法発布式之図」（大学史資料センター所蔵二〇二一〇一）

発布式の一八八九年二月五日、高田も新聞記者として拝観を許された。

○憲法発布時の諸新聞（大学史資料センター所蔵二〇〇二七）

新聞各紙はこぞつて憲法発布を祝した。



読売新聞連載「国会問答」

○『講壇改進黨法雜誌』創刊号（図書館所蔵サワ三五）

憲法発布から六日を経た一八八九年二月一日、高田は憲法の紹介と研究を目的に『講壇改進黨法雜誌』を発刊する。経営難のため一年足らずで廃刊。高田の憲法論は、明治中期における最もリベラルなものと評価されている。

○読売新聞連載「通俗大日本帝国憲法註釈」（新聞をパネル化）

『国会問答』同様通俗的な問答体で、憲法の内容についてわかりやすく解説している。一八八九年二月一四日から約二ヶ月連載された。

○高田早苗『大日本帝国憲法註釈』（大学史資料センター所蔵D三一一三五）

憲法の發布を祝賀した国民の中には、実はその内容を全く知らず、「絹布のハッピー」が下付されると思い込んだ者すらいた。高田はこうした状況を打開し、国民にその内容をあまねく知らせようと、著書・演説等で精力的に啓蒙活動を展開した。本書は、大阪の攻法会に招かれて行なった講義の筆記。

○『租税論』（一八八八年。大学史資料センター所蔵D三二一三二）

もと政学講義会から講義録として分冊発行されたもので、一八八八年七月に合冊版が刊行された。売れ行きがよかったため、翌年一〇月には訂正・増補を施し第三版を刊行した。イギリスのマカロックの租税論に依拠し、フランスのポーリユエの学説も参照している。

七 文芸批評家として

高田早苗は文芸の世界にもその名を残している。高田は、親友坪内逍遙の記した『当世書生氣質』や、当時のベストセラ―『佳人之奇遇』の批評を発表し、日本に近代的文芸批評の手法を紹介し、「批評の元祖」と呼ばれた。また西洋の修辞学を日本に紹介したり、『読売新聞』に著名な文学者を招聘したり、また日本の演劇の近代化を目指して演劇改良運動にも従事するなど多彩な活動を行なった。また坪内による東京専門学校文学科の創設を後押しし、東京専門学校に多数の文学者を講師として招いた。

〔主な展示品〕

○「当世書生氣質の批評」（『中央学術雑誌』二二、一八八六年一月。図書館所蔵サト九七）



西洋の修辞学を先駆的に紹介した『美辞学』

坪内逍遙の『当世書生氣質』を批評したものの。日本における近代的文芸批評の先駆けと評価されている。

○「佳人之奇遇批評」(『中央學術雜誌』二五、一八八六年三月。図書館所蔵サト一〇〇)

東海散士著『佳人之奇遇』を批評したもの。高田はこうした文芸批評により「批評の元祖」と呼ばれるようになる。

○『美辞学』(一八八九年。大学史資料センター所蔵D三二一三三)

日本人が書き上げた最初の総合的な修辞学書。ペインやスペンサーを引用しつつ、西洋の修辞学を日本に紹介し、日本の文学がより洗練されたものとなることを目指した。

○森田思軒宛高田早苗書翰(一八八九年。図書館所蔵文庫一〇一八八二七一)

高田は演劇改良運動にも参加した。この書翰はユーゴの翻訳者としても知られる森田思軒に宛てて、演劇改良団体である演芸協会について語った書翰。

○ラフカディオ・ハーン宛高田早苗書翰(図書館所蔵ヌ六九三三〇)

高田はハーン(小泉八雲)を早稲田大学に招聘した。ハーンは一九〇四年四月から教鞭をとったが、同年九月末に急逝した。著作『怪談』を寄贈されたことに対する一九〇四年五月二四日付礼状。

八 企業経営

高田には起業家としての一面もあった。最も代表的なものは東京専門学校出版部の経営で、危機に陥ったとき高田は出版部を学校から分離し、そのリスクを一身に背負って経営を立て直した。また、早稲田大学関係者によって創立された日清印刷株式会社（現・大日本印刷）や、日清生命保険株式会社（現・T&Dフィナンシャル生命）の産婆役を果たした。ほかにも、起業を志す校友を渋沢栄一らの実業家に紹介するなど、陰から起業活動を支えた。

〔主な展示品〕

- 「政学講義会設立の趣意」（『中央学術雑誌』二七、一八八六年四月。パネル）
一八八六年、高田早苗は東京専門学校の講義をもとに講義録を発行することを思いつき、横田敬太経営の政学講義会から講義録を発刊する。のち一〇〇万人以上の受講者を得た『早稲田講義録』の源流である。翌年、政学講義会は東京専門学校出版局と名前を変更。
- 『政学部講義』第一号（一八八七年。大学史資料センター所蔵E三五六一）
東京専門学校出版局発行の講義録。高田は「政体論」を連載した。
- 『日清印刷株式会社創立日誌』『日清印刷株式会社開業記事、其他記録』（大学史資料センター所蔵〇三三三二一、二）
早稲田大学出版部の本や講義録の発行量が増えたために、滞りなく印刷することが困難になった。そこで高田は、日清印刷株式会社の設立を發起する。これらは、一九〇六年から翌年にかけてのその設立過程を記した日誌。

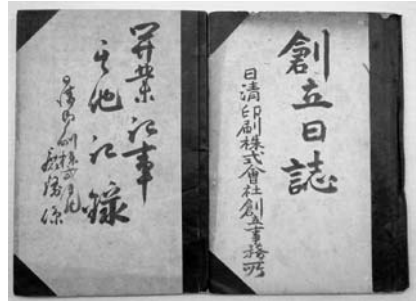
〔主な展示品〕

○熱海小宴図（坪内逍遙筆、市島謙吉識語。演劇博物館所蔵九〇六七）

一九二四年一月二六日、高田・坪内・市島謙吉・黒須広吉が熱海の露木旅館に会合したときに坪内が描いた戯画。

このコーナーでは、私人としての高田にまつわる品々を集めた。高田家に残っていた遺品の多くは戦災で焼けてしまったものの、わずかに残った品々が、高田の人となりを今に伝えている。

九 私人高田



日清印刷株式会社創立関連史料

○日清印刷株式会社事業報告書（図書館所蔵ヨ一〇七三三八四、八、九、一二）

日清印刷は、出版部の印刷を全面的に引き受けるとともに、創業直後に東京書籍より国定教科書印刷を受注するなど、順調な発展を遂げる。一九〇九年に市島謙吉が相談役に加わると、その後二年足らずで利益金額は二倍以上の二万六千円にまで達した。

○日清生命保険株式会社広告ポスター（大学史資料センター所蔵）

日清生命保険は、慶応義塾中心の千代田生命に対抗して、大隈および早稲田関係者を中心に一九〇七年に設立された会社で、早稲田の卒業生を主な顧客に想定していた。高田は発起人として、その産婆役を果たした。

煙管を手に寝そべっているのが高田。

○高田早苗家族写真（二〇〇九年寄贈資料）

○高田早苗立像（石本暁海作、一九一七年。高田興治氏所蔵）

一九二五年京都での大正天皇の即位礼に際して写し、一九一七年に完成した。

○書幅「謡曲十五徳」（高田興治氏所蔵）

○謡曲台本（高田興治氏所蔵）

○高田早苗旧蔵の住所録『宿所控帳』（図書館所蔵ヌ六七一―三）

○高田清雄宛高田早苗しゃもじ書翰（高田興治氏所蔵）

○高田清雄宛高田早苗絵葉書（高田興治氏所蔵）

○懐中時計（高田興治氏所蔵）

○眼鏡（高田興治氏所蔵）

○銅版レリーフ（高田興治氏所蔵）

○高田早苗吹込レコード「新皇室中心主義／謡曲（隅田川）（松風）」

（大学史資料センター所蔵二〇〇四年度寄贈資料）

偏狭な忠君愛国主義を批判した演説と最大の趣味の謡曲を吹き込んだもの。

○高田早苗早稲田大学葬関係書類（一九三八年。大学史資料センター所蔵「三

号館旧蔵資料」四六一―五）



染井墓地高田早苗追慕之碑

○染井墓地高田早苗追慕之碑（大学史資料センター所蔵写真B九三二一〇）

一九三九年に建立された。市島謙吉題額、五十嵐力撰・書。

おわりに

今回の「高田早苗展」では、早稲田大学の育成者としての活動はもちろんのこと、これまであまり知られていない高田の多彩で先駆的な活動にもスポットを当てた。また高田早苗の御子孫の方からも史料を借用し、プライベートな側面にも光を当てた。少しでも多くの方が「高田早苗展」をご覧になり、高田に関心を持っていただけたなら幸いである。

なお、高田早苗には回顧録『半峰昔ばなし』が存在し、近代日本の多方面にわたって貴重な証言を残しており、また大学史資料センターでも、高田早苗の多方面にわたる活動を学問的に検討した『高田早苗の総合的研究』を刊行している。展示をご覧になって高田に興味を抱いた方は、ぜひこれらの書物を手にとって読んでいただき、早稲田が誇る偉人の一人である高田を見つめなおすきっかけにさせていただきたい。

附記：展示にあたって、高田早苗の御子孫にあたる高田興治氏より、多数の貴重な所蔵品をご提供いただきました。この場を借りて、謹んで感謝の意を申し述べさせていただきます。